

# パウロはストア派の影響があるといわれていますが。ピリピ人への手紙4:8-14

## パウロとストア哲学の関係について（ピリピ4:8-14を中心に）

パウロの書簡を読んでいると、「パウロはストア派哲学の影響を受けているのではないか」としばしば議論されます。その典型例としてよく取り上げられるのが、ピリピ人への手紙4章8節から14節にかけての内容です。この箇所には「どんな境遇にあっても満ち足りることを学んだ」（11節）や「わたしを強くくださる方によって、何事でもできる」（13節）という有名な言葉があり、ストア派哲学における自足（autarkeia）や徳を重んじる姿勢との類似が指摘されるからです。

以下では、ピリピ4:8-14の内容を簡単に概観しながら、ストア派の考え方との接点・類似点、そして相違点について整理してみましょう。

## 1. 箇所の概要

### 4:8-9 「何であれ...それを思い巡らしなさい」

（新共同訳を参考とした要約）

最後に、兄弟たちよ。真実なこと、高尚なこと、正しいこと、清いこと、愛すべきこと、評判のよいこと、徳と呼ばれるもの、称賛に値するものがあれば、それらをよく考えなさい。.....平和の神はあなたがたと共にいてくださいます。

ここでパウロは「真実」「高尚」「正しい」「清い」「愛すべき」「評判のよい」「徳」「称賛に値する」といった徳目を列挙し、これらの事柄に心を向けるよう勧めています。ストア派の哲学では、論理（ロゴス）に適った「徳」を求め、内面的な品性を整えることが重要視されていました。パウロの列挙する徳目は、当時のヘレニズム社会全般で「立派な徳」とみなされていたものであり、ストア派だけでなく広くギリシャ・ローマ世界で推奨されていた「美德（ἀρετή, aretē）」のリストとある程度重なります。

### 4:10-14 「どんな境遇にあっても、わたしは満ち足りることを学んだ」

（要約）

あなたがたが再びわたしのことを心に掛けてくれたことをうれしく思う。ただ、わたしが乏しいからこう言うのではない。わたしは、どんな境遇にあっても満ち足りることを学んだからだ。...飢えていても満ち足りていても...どんなことでも、わたしを強めてくださる方によってわたしはできるのである。...あなたがたは困難の中にあるわたしを助けてくれた。

特に11節の「どんな境遇にあっても満ち足りることを学んだ」という言葉には、「自足」を意味するギリシア語の“αὐτάρκης (autarkēs)”に由来する語が使われています。ストア派をはじめとする当時の哲学では「自足」すなわち**自分の内面の徳に拠って生きる姿勢**が理想とされていました。外的環境に左右されることなく、理性（ロゴス）に従って生きることによって心の平安を得る――これがストア派哲学における理想でした。

パウロの言葉とストア派の自足（autarkeia）の思想は、表面的には非常によく似ています。しかしパウロは続く13節で、「わたしを強めてくださる方によって（ἐν τῷ ἐνδυναμοῦντί με）」何事でもできるのだ、とはっきり告白します。これは、ストア派的な「**自分の理性や徳に基づいた自立**」とは大きく異なり、**神（キリスト）の力により頼むことで得られる内的自由**が根拠となっている点が特徴です。

## 2. ストア派との類似点

---

### 1. 徳目の重視

ピリピ4:8で列挙される「立派なこと」「徳」「称賛に値すること」を追求する姿勢は、ストア派だけでなく当時のヘレニズム思想全般における「徳倫理」と重なる部分があります。

### 2. 自足 (autarkeia) や心の平安の強調

外的状況に左右されない心の安定——これはストア派が理想とした「アパテイア（無感動・受動性の排除）」や「内的自由」を連想させます。パウロも「どんな境遇にあっても満ち足りることを学んだ」と述べ、同様の心の姿勢を語っています。

### 3. 現実の苦境への対応

パウロが語るのは、投獄や迫害といった厳しい状況の中でも喜びと平安を保つことです。ストア派の哲学者たちも、死や苦痛、逆境に直面しても動じない姿勢を求めました。

## 3. ストア派との相違点

---

### 1. 根拠が「キリストとの関係」にある

ストア派における自足は、究極的には自らの内にある理性や徳に立脚するものです。対してパウロは、「わたしを強くしてくださる方によって」すべてのことに対応できると述べます。これは人間の理性や努力ではなく、**キリストとの結合**（パウロ神学で重要な主題）から来る力に依存する、という点が根本的に異なります。

### 2. 共同体の愛と奉仕

ストア派の教えも、人間同士の相互的な助け合い（コスモポリタニズム）を説くことはありましたが、パウロ書簡では「キリストに結ばれた共同体」の交わり、具体的に献金やサポートを行い合う愛の交わりが強調されます（4:14で「苦難にあったわたしを助けてくれた」と感謝している）。これは単なる「個人の内面の平安」を越え、**霊的家族としての教会**が生み出す相互扶助と愛の交わりを土台としています。

### 3. 終末的・救済史的な展望

パウロの書簡全体を通じて、「終末における復活と神の国の完成」を視野に入れた救済史的な視点があります。ストア派も世界観を持ってはいましたが、**キリストの再臨や新しい創造に期待する**という点は、明確にユダヤ・キリスト教的な視点です。

## 4. まとめと意義

---

- **類似点:** パウロはローマ帝国というヘレニズム世界の中で生き、当時広まっていたストア派を含む諸哲学の言語や概念を共有していた部分は否定できません。特に「徳や自足」「内的自由・平安」という点において、両者は多くの共通の言語・倫理観を持ち得るものでした。
- **相違点:** しかしパウロの場合、その「満ち足りる心」や「できる」という力の源泉は、自己の理性や努力ではなく「キリストにある信仰と恵み」に求められます。ストア派が自己完結的な自律を重視したのに対し、パウロの自足は「神との関係」に根ざしている、という神学的な差異が決定的です。
- **意義:** パウロは異邦人世界の読者にもわかりやすい言葉で福音を伝えるために、当時一般的に通用していた倫理思想や語彙（ストア派的な表現・含意）を効果的に用いたと考えられます。その一方で、彼の中心メッセージは「キリストにあってこそ真の自由と喜びがある」というキリスト教信仰の核心です。ストア派をはじめとする諸哲学のエッセンスを活用しつつ、それを越える形で「キリストとの結合」に

根拠を置く新しい生き方を示したことが、パウロのユニークな点といえます。

---

## 参考にするるとよい視点

- **歴史的背景:** パウロが生きた1世紀の地中海世界は、ストア派・エピクロス派などのヘレニズム哲学が普及していました。パウロ自身はタルソ（キリキヤ地方）の出身で、ある程度ギリシャ・ローマ文化や哲学に接していた可能性が高いとされます。
  - **言語面:** パウロの使用するコイネー・ギリシャ語には、当時の哲学的・倫理的用語が豊富に見られます。ただし、パウロはそれらを「福音の文脈」で再解釈し直していると言えます。
  - **全体神学との整合:** ピリピ4章だけでなく、ガラテヤ、ローマなどパウロの他の書簡も読むと、「行いではなく信仰と恵みにより義とされる」というパウロ神学の核心が明らかになります。自足・徳目という概念も、そこから照らし直す必要があります。
- 

## 結論

ピリピ4:8-14には、確かにストア派の自足（autarkeia）や倫理観との共通点が見られますが、それは「当時のヘレニズム社会で通用していた普遍的な徳概念を、パウロがキリスト者として再解釈・適用した結果」であると言えます。パウロはストア派のように自己の理性や努力で平安を得るのではなく、「**わたしを強めてくださる方**（キリスト）と結ばれているからこそ、あらゆる境遇に対応できる」と述べ、その根拠を神との人格的な関係に求めています。したがって、ストア派の影響を受けつつも、パウロの中心は常に「キリストにある救いと力」に置かれている点が特徴的なのです。